

^ 13
3554
1



丙申孟春新鐫

天13
3554

宮田舜次先生著

繪本琉球軍記

全部十冊

漆橋岡田玉山畫



早稲田大學
33.11.10

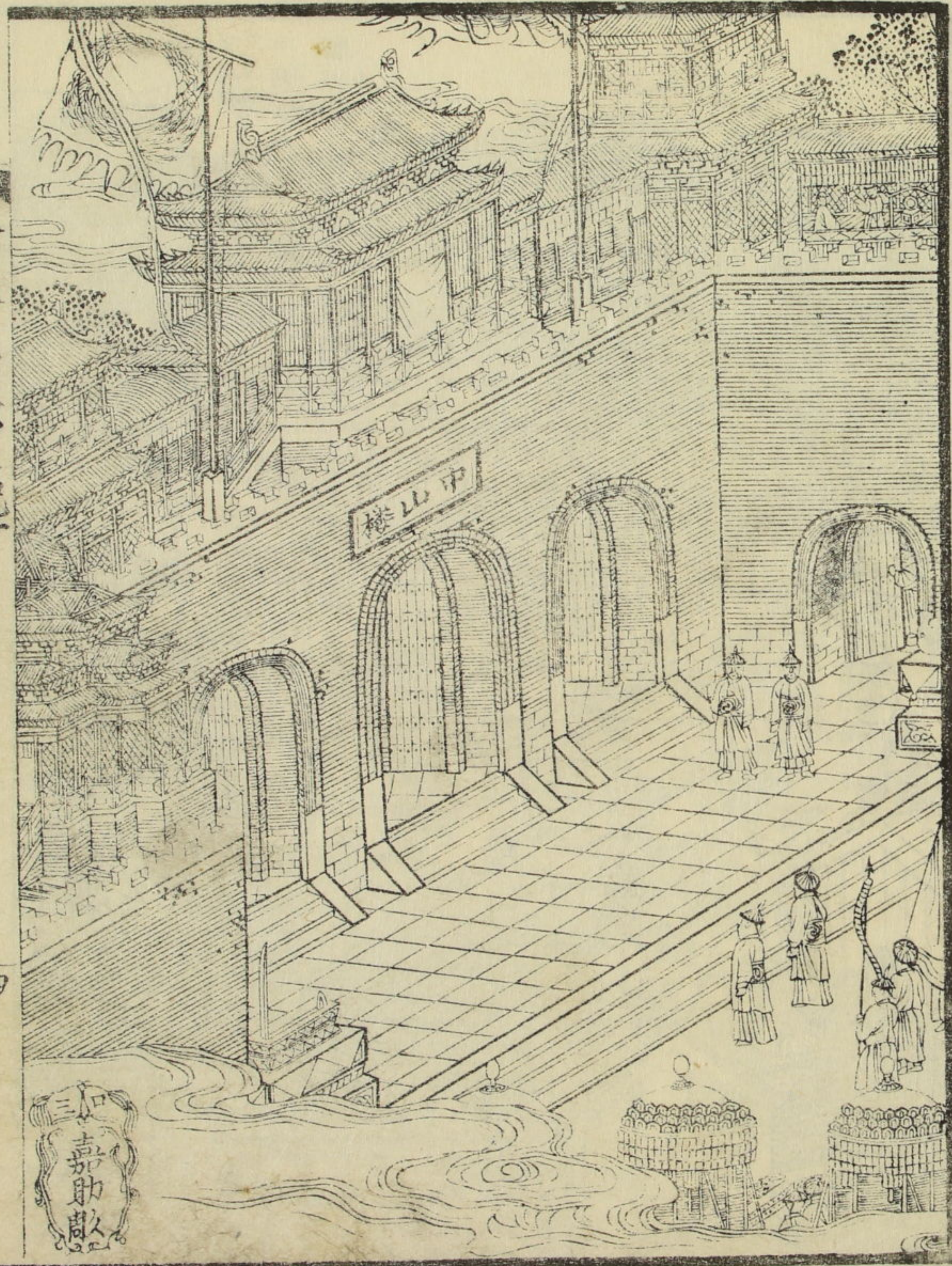
宮田舜次

琉球軍記

琉球軍記
宮田舜次先生著
漆橋岡田玉山畫

宮田舜次先生著

第一



中山

嘉助殿

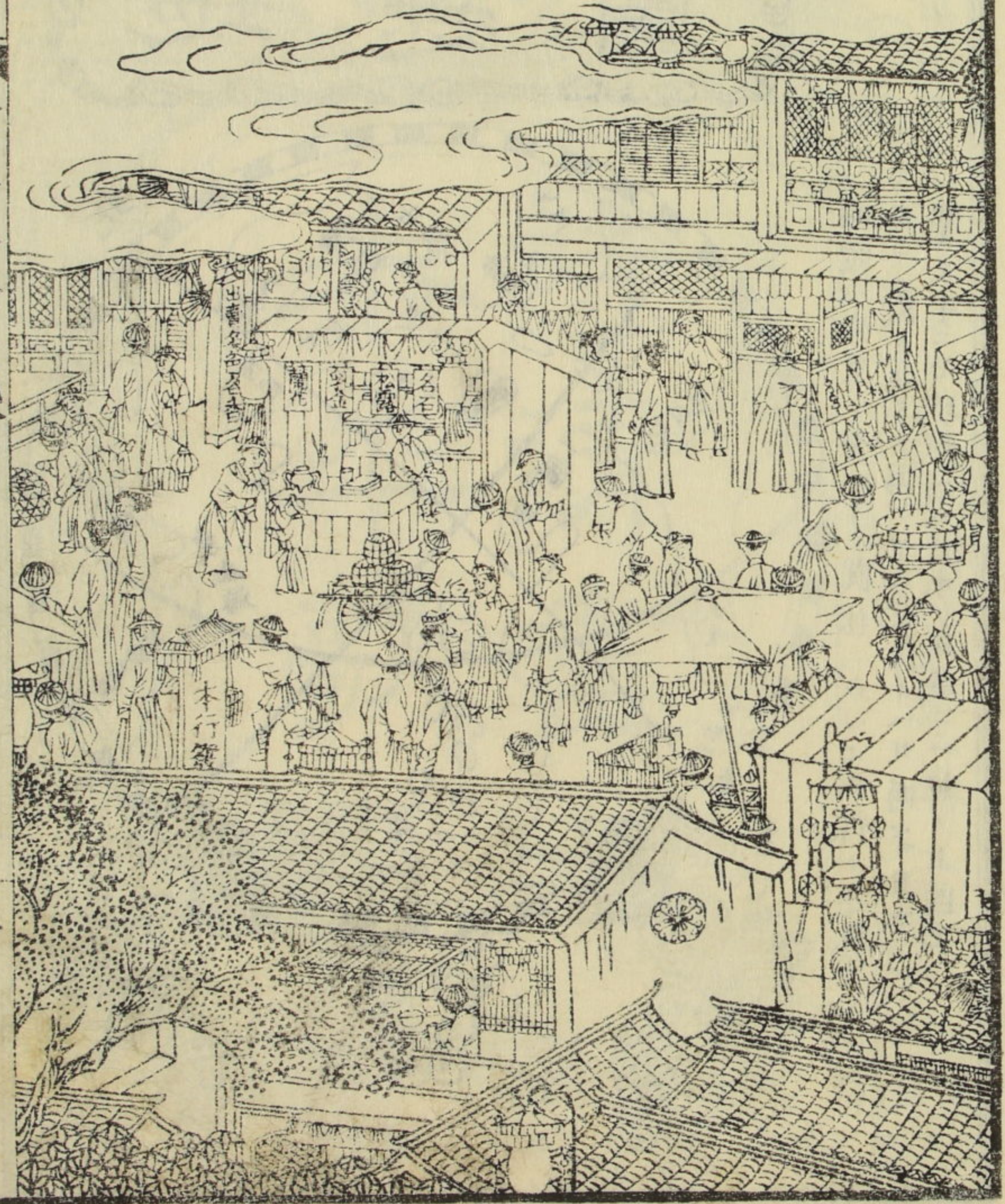


中山省首里
王城の圖

維新軍記

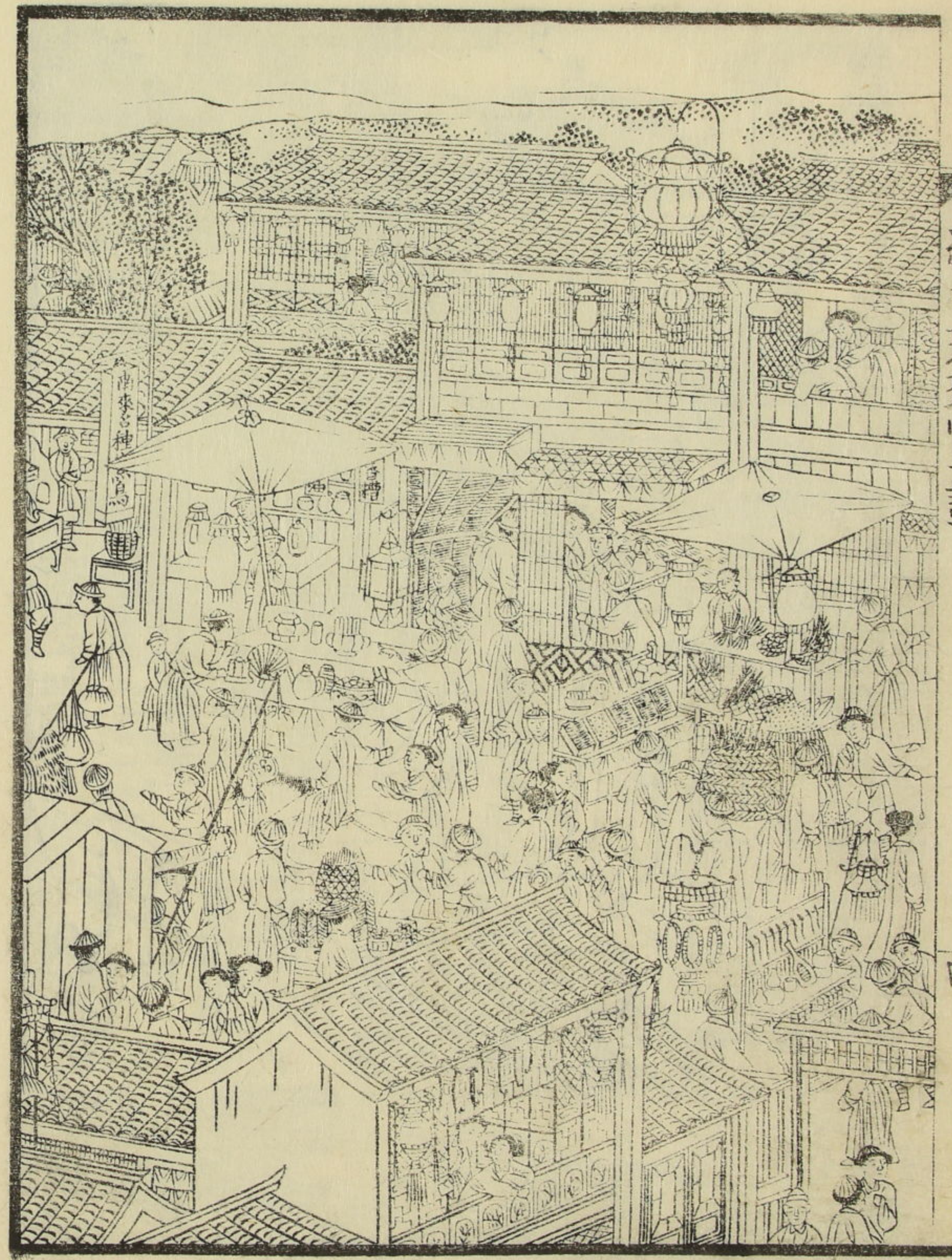
三

琉球の交易の繁栄の圖

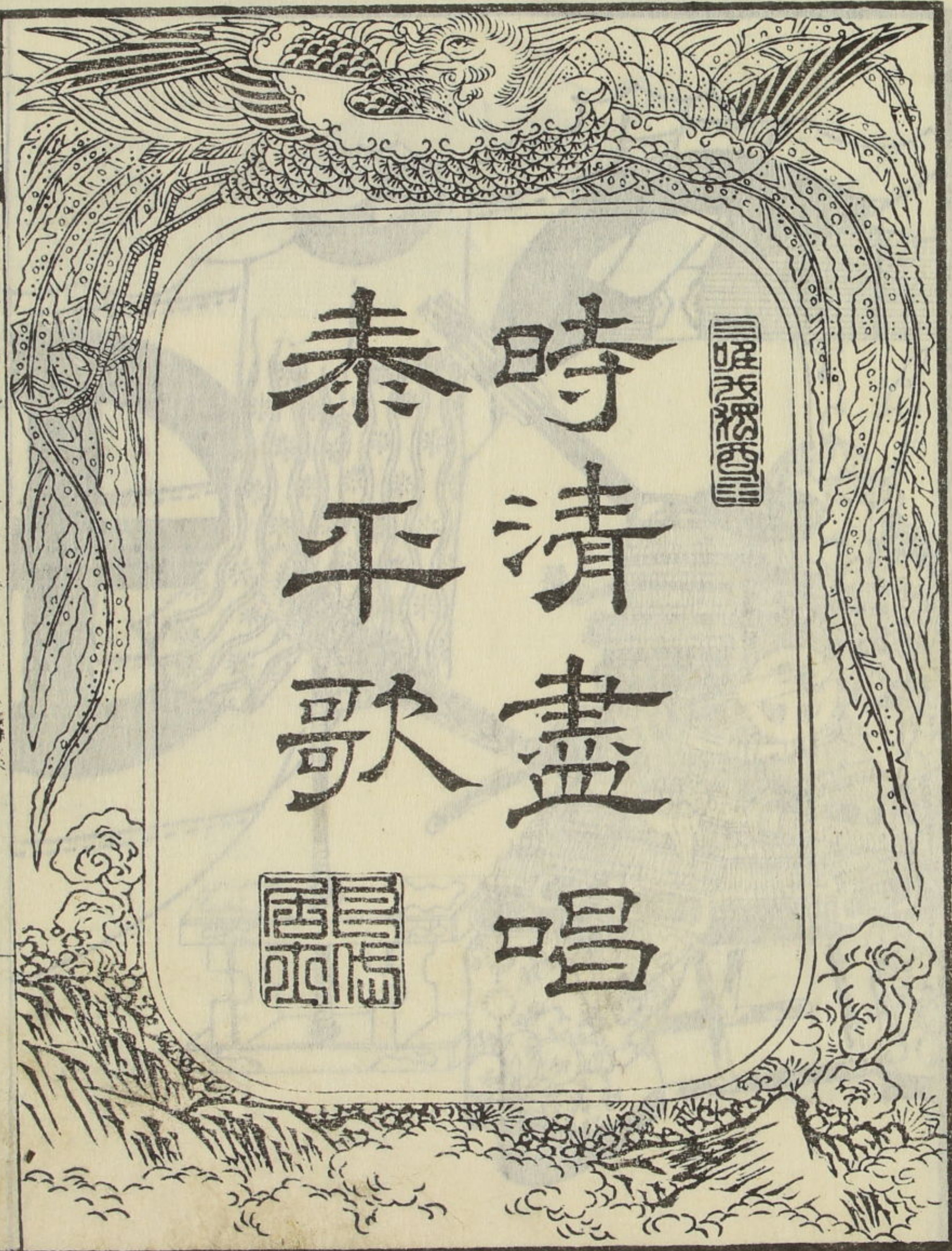


會本琉球圖記

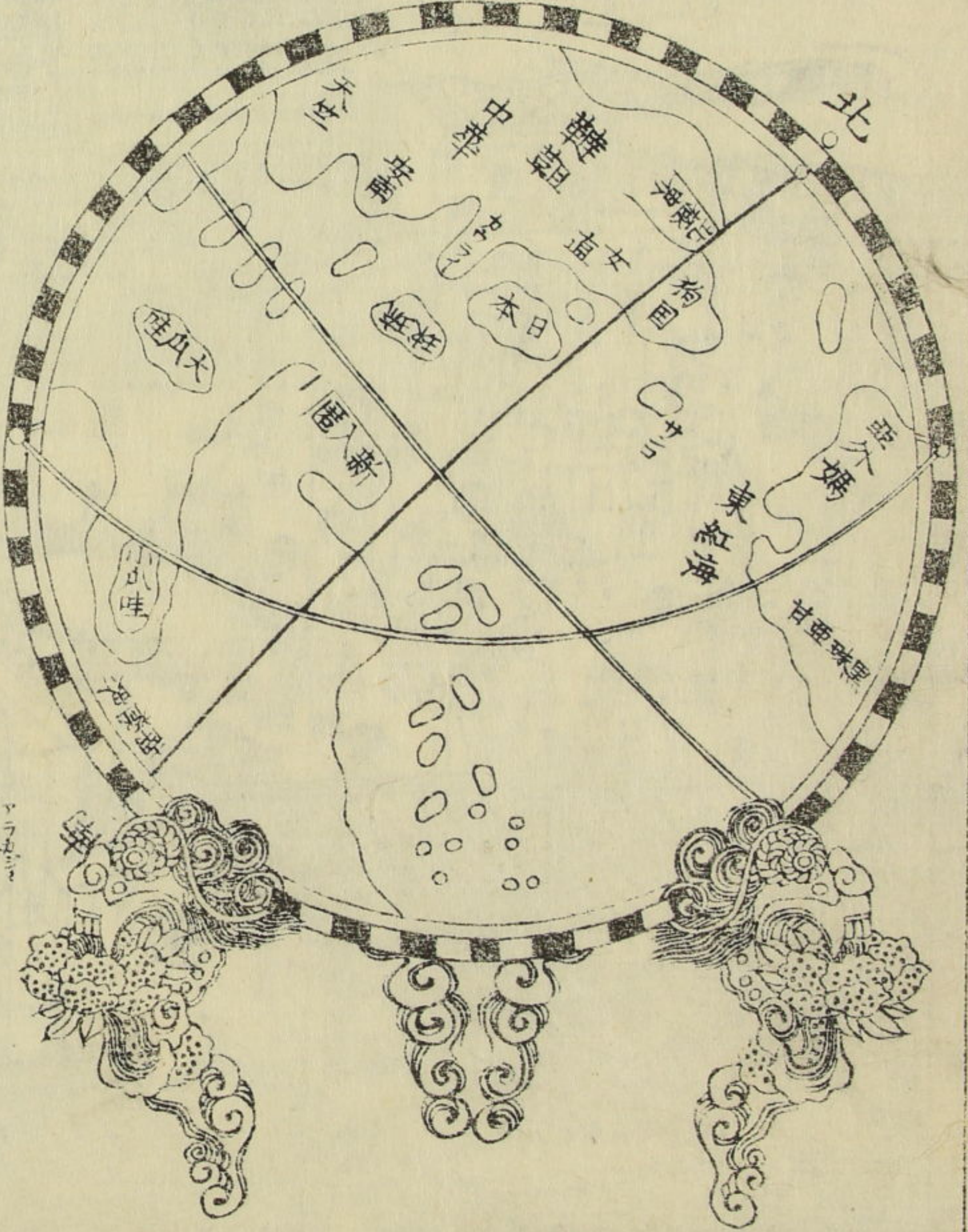
序五



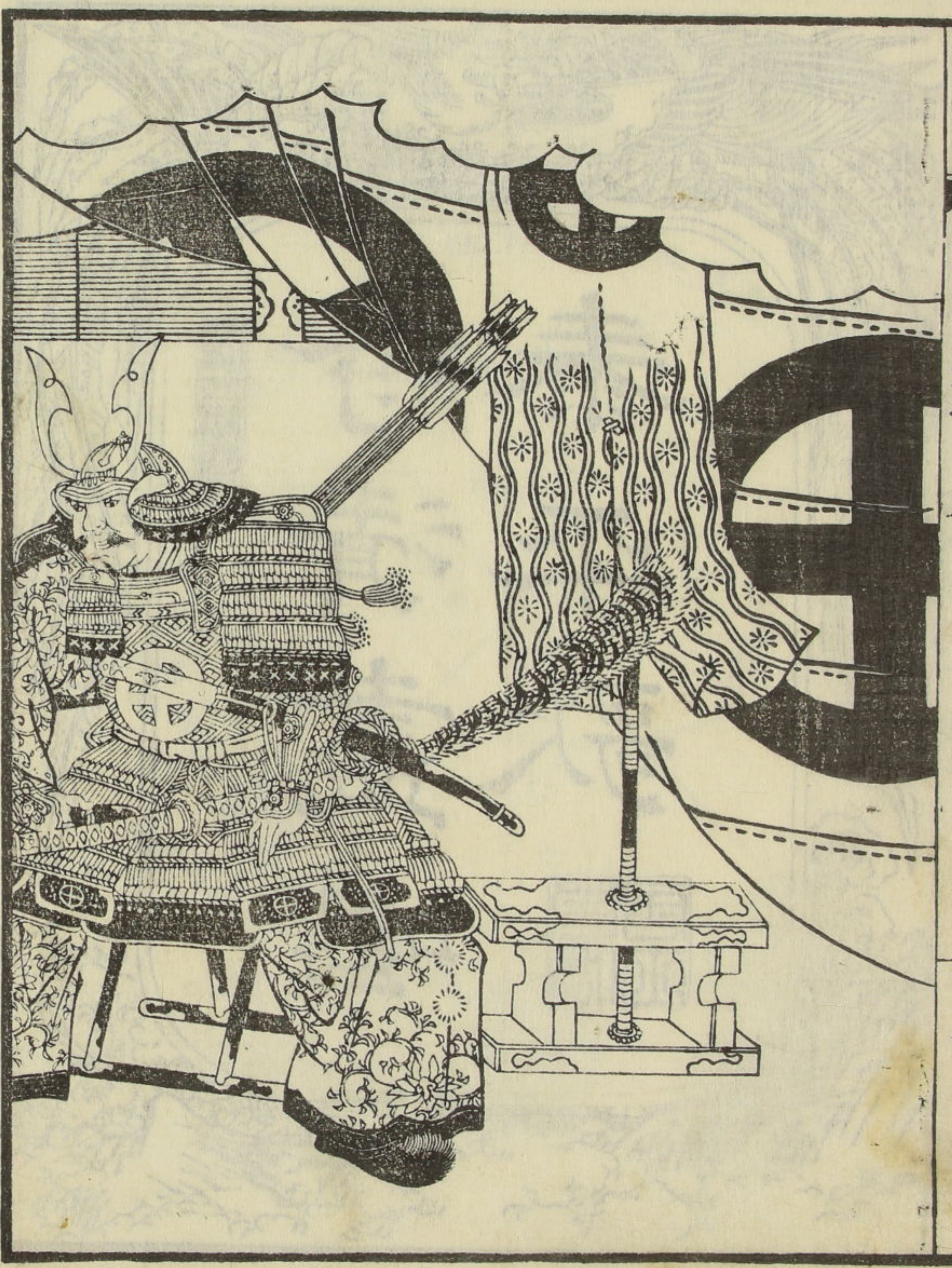
會本琉球圖記



地球圖

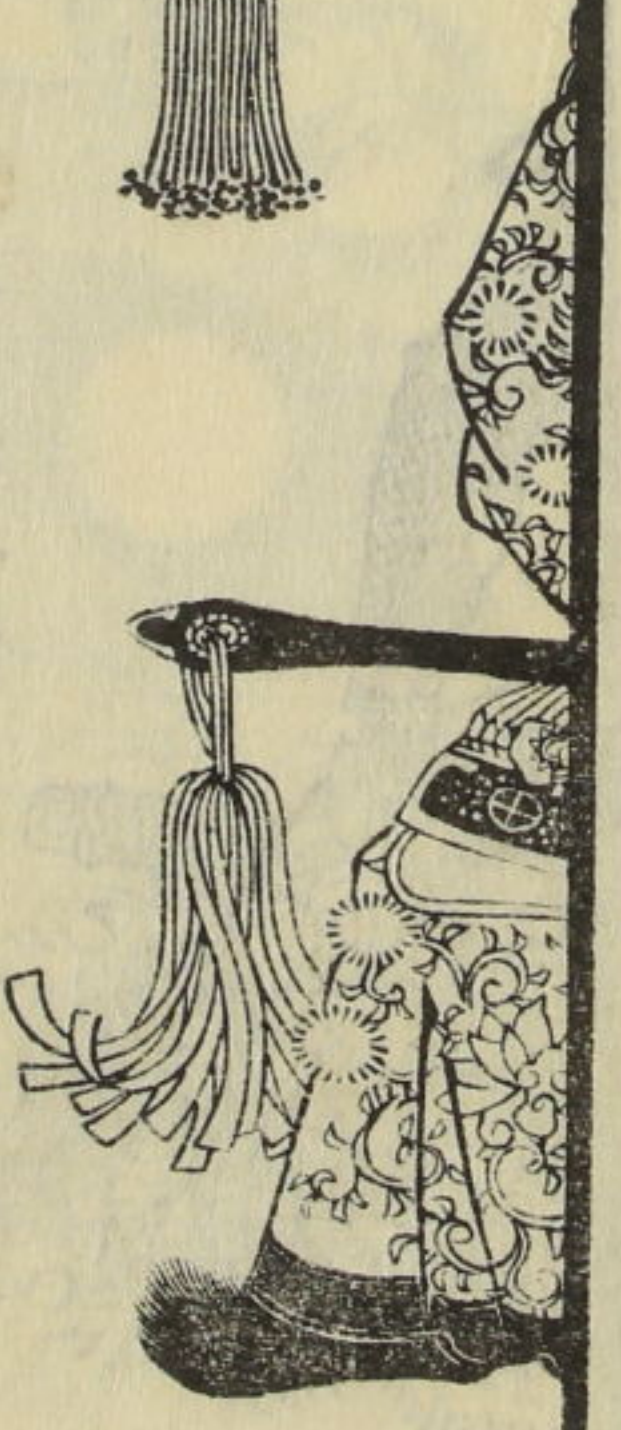


此圖ハ世界ノ全形ヲ圓球ニウツス故豫ナリ然ニ
 天ヲ戴ク処ミナ国ニアラストイヘ凡過半日本ニ
 屬ス中ニモ琉球国ハ日本ノ武威ニ一統ノ上国也



志摩多肥後守從四位上中將

源朝臣忠久卿之像



威震九溟 德及三州
琉球讚謨 扶桑名將



繪本



鎮西八郎源朝臣爲朝卿
ちんせいはつらうげんあそのみかぢのらそんちゆうあそみかぢ
 行年六十六歳之像
うらひろくじゅうろくさいのざう

持弓生申もりきと
 東満

いそやきと名乃
 月申との

神代
 弓

繪本

口八二

仁木武藏守藤原勝氏像



繪本琉球軍記初篇總目録

壹之卷

志多肥後守忠久之傳

位吉内村加後麒麟見出產の圖

薩長川島本塔の圖

鎮西八節原為朝之傳

為朝鬼ヶ島吐書人と伏すの圖

貳之卷

為朝再渡鬼ヶ島

為朝弓勢款舟と覆るの圖

忠久仁義迎重仁親王

重仁親王薩員へ入るる圖

重仁親王佐古系に城へ移るる圖

爲朝布八陣伏二將

志久多家此二將佐古系の城を夜討する圖

三之卷

爲朝用宴客意二軍

爲朝八陣と布て三將を伏する圖

忠久琉球征伐蒙台命

同圖

志久多忠久歸城川島

忠久集諸士後琉球征伐

同圖

附 琉球三省三十六考の圖

同 首里王城之圖

同 王城交易繁榮の圖

佐野常刀大同答勝氏

卷之四

勝氏定計渡海琉球圖

勝氏智計要漢遊へ兵船を送る圖

武藏守勝氏首里王城の図

琉球國王還幸の図

忠久仁木勝氏任元帥

同圖

勝氏法軍定陣烈

武藏守雄をよめて諸軍の配と定る図

五之卷

佐野帯刀大爭先陣

同圖

勝氏再諸軍定陣烈

薩長勢兵向琉球國

薩長勢川島と發して文の浦へ越く圖

薩長勢波濤と凌いで琉球國へ渡海の圖

六之卷

帯刀根仁木勝氏

佐野帯刀鎧紋と付圖

琉球王四時の淫樂

琉球尚寧王舟りそびの圖

尚寧王淫樂を放して御幸の圖

加納淡因木陳文積と欺く圖

川橋諸將列着琉球要溪澁

要溪澁合戦

要溪澁城夷人の図

琉球御政勇戦

七之卷

要溪城落着

在田忠左衛門の門を破つて一巻をのり

橋久智智計欺魏伯

同圖

舟子諸將攻取唐洲城

唐洲唐落城の圖

佐野常刀再爭先陣

同圖

陳文磧穆陽又敗走の圖

御政曹起等出張清風炭

伴周院忠棟清風炭の敵陣を破る圖

八之卷

佐野常刀夷人金門城

築地小舟を鑑英と付る圖

如く軍勢向清風炭

薩長勢清風夜に並發向の圖

琉球勢薩長勢對陣

清風夜合戦の圖

武藏守軍備十段

琉球徐晟和軍に十段備と破る圖

佐戸見久秀大戦徐晟

同圖

九之卷

佐野帯刀怒緒の放後

帯刀怒緒の放軍に向ふとるん圖

勝氏定計破徐晟

勝氏奇計琉軍と破る圖

琉球徐晟勇戦討死

同圖

琉球勢惣紋軍

仁本勝氏曹起と討殺し圖

仁本勝氏紀首姓

勝氏松尾勝邦に命とて龍雲城へ向し圖

拾之卷

佐野伊勢兩將責龍雲城

佐野伊勢 兩勢就雲城とまらるる圖

朱田説智計破日本勢

朱田説夜討佐野常刀勇戦の圖

仁本勝氏佐野惣法令遠

同圖

勝氏深計松尾が罪とまらるる圖

常刀再眼仁本勝氏

常刀が陣門は破清の屋首とまらるる圖

目録終

繪本琉球軍記

卷之壹

目録

志摩多肥後守忠久傳

住吉明神加護生麒麟兒圖

薩州川寫本城之圖

鎮西八郎爲朝之傳

為朝鬼ヶ嶮渡圖

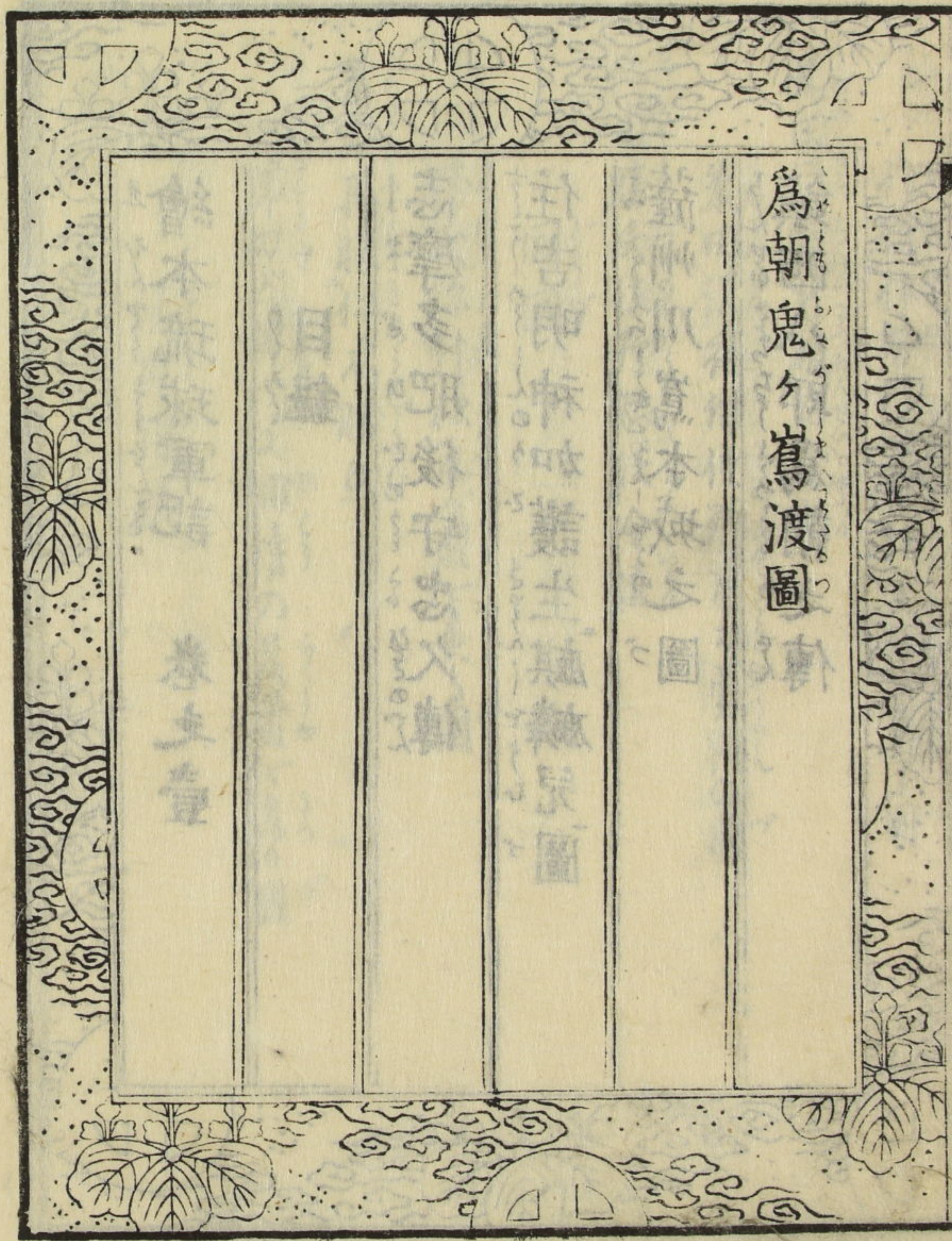
繪本琉球軍記初篇

肥後守忠久と其豪將の事

下原の頼朝

其子

繪本琉球軍記初篇 卷之十一



繪本琉球軍記初篇 卷之一

忠慮多忠久之傳

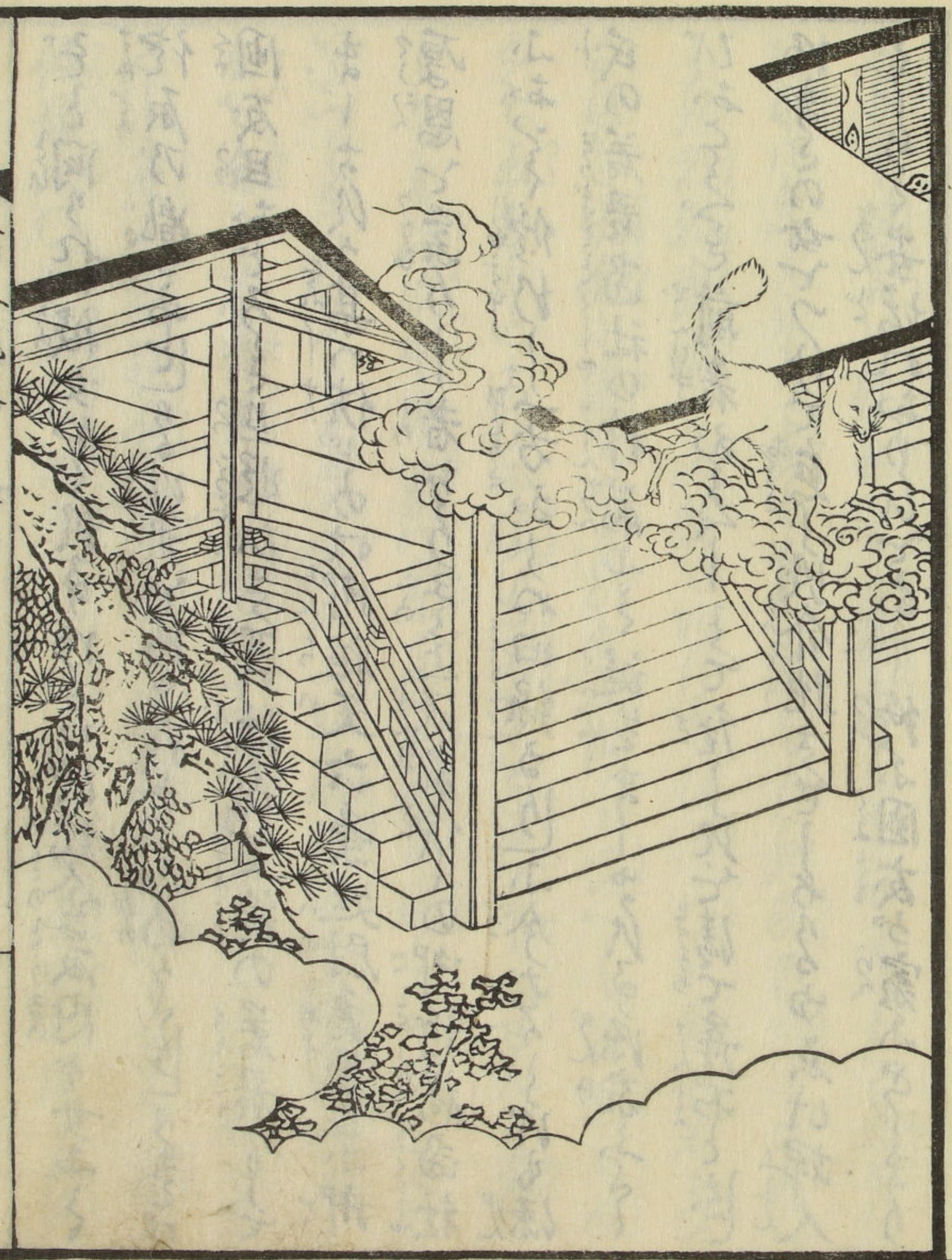
孫子曰夫將者日統月將能去能就龍能柔能剛能進能退能弱能強不動如山岳難知如陰陽無窮如天地充實如大倉浩渺如四海眩矚如三光預知天文之早滂先識地理之平原察陣勢期會揣敵人短長而已知而知人此是將帥之玄機と云々 肥後守忠久と其豪將の事

三男が命を承けたりと斯く頼朝は告げられたるに於ては
 時政が方へおげのめい替へかくまひぬり内又時政の娘
 政子と宮通のり一が時政と知りてつどもことごとく
 打ちをわたりて宮にまゝに比企兼光の頼朝の二の孫氏方
 こそ頼朝と申し人仰ぎ志とてつゞきつゞき致のりま
 里自らが彼へおのづかしく頼朝の娘とまゝに頼朝
 あり一が頼朝をまゝとけりける兼光と頼朝と
 て又宮通を及ひぬり政子とまゝに頼朝の娘とまゝに
 むくまひ源氏を廣次と命に侍ひ出とて頼朝と
 くらげは娘已に懐妊して條月やと近しくまゝに廣次

さへく不殺すに忍びつらふも一と地人とおひえつゞき政子
 まへ出候りて中々の件の女と進路してころとつゞき
 初ま中べ一兵遠く越のきりふつとつゞき人志を恨み
 人とつゞきれば政子はふ同心一万隻のありつゞき
 つまびべ一と免しつゞき廣次を頼朝の用匠の女
 つゞきを頼朝とておのづかしく廣次途中を退き
 魚沼の人とおひつゞき懐妊の女一人をてめふ人も
 候ふおひ一日二日と候ひ終ふ政子とて来り一が彼始中
 伊豫の國河津のりつゞき母方小就て不縁ありといひけ
 廣次をてめふつゞき伊豫の國小浜らんとて頼朝の

うらと来りてうれときてやうのいれいそより夏はへ帰
りて婦人のそより便船して悪たふ伊豫へさうりて
くんぐも短衣をい知いあふふなと云あそそ身は伊
夏へゆりてと改ふ女は只一人はそよふりくを海へたど
りて佐よしの明神の祀りて来りてがそ名其目もくまふ
り時小治兼三年八月十六日あり月明くうりてとくも
更同人もちくあそる松吐音いう風ふ吹つてとて冷
くあそとてとくくけさそあひつげたのむりけるも
打うけ涙ふときてわたりしが依ふ腹痛をさうりふおこり
産のえへとてとくくむおしも佐よしに産中助として

金光散爛とひくろとと出産本とてくいとえへるがならまら
男子平産して其なくあそまそ産へ時おづくともなく
白狐一ツさうりて彼女とさあぐ介抱したりけとそ
佐よしの神磯は書圓友といふ者あそあそりるが依
小実あくんどうり神威のむりふ光あそりて八方と
輝せくくあひく甲とひうりて目あてあそひとさうり
委細の指子とさうひつり介抱する内白狐は何と
ともうとびまうりてと明神の月下はあそりて
いやくあそんどうりさる福ふ圓友の神あそとさうい産て
彼女とさかへ連うへとそあそあそ身いつるる人の娘と



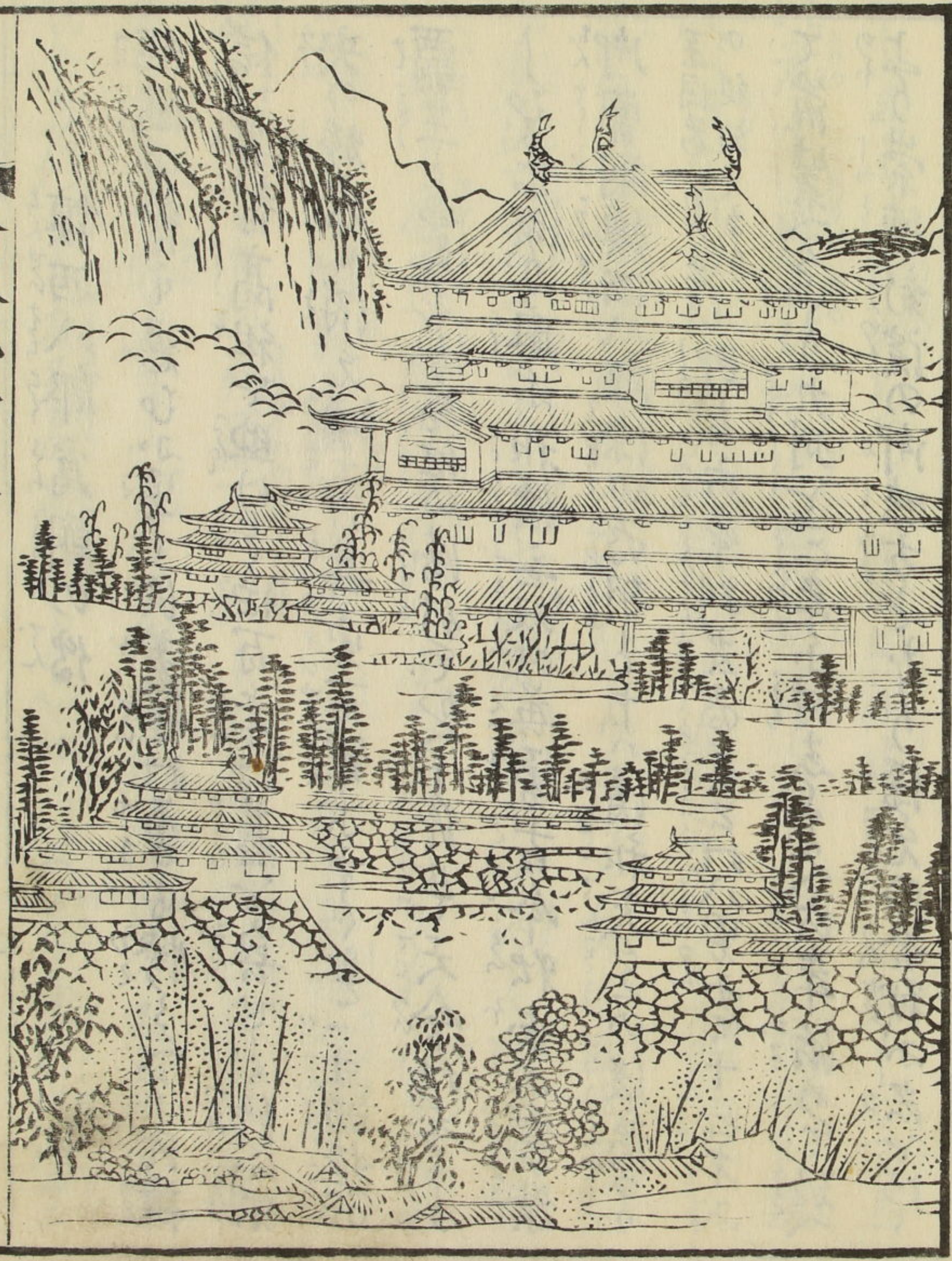
住吉
 加賀麒麟
 見を
 老丸

ごと同りれば彼女かくはるりて比企重房が女も
 佐原の亂とせしむるは身とてゆきてはすふ物なりしはま
 國友且をどろとせしむるは源氏正統の若君なりて
 ましちの某の依どのの御祖父六条延尉為美公の御
 厚恩とせしむる者なりき上源家代々の御行禱由社
 小おつと修めり一方ふくぬ旧縁あり小今をうづりも源
 氏の若君由社の神前山く誕生すしやいり源家も
 びおとせしむる前表ありてとて産しはて清て産而は
 何まこの女とつけては介抱させしりるゆゑは婦人
 とせしむる安堵はありとては終ふ國友が家小とせしむる

志を一時言と傳承るが其年もとせしむるは
 治承元年とせしむるは其年もとせしむるは
 とは親朝東國小武兵とゆげあり國八員悉く志を
 せしむるは源家小威とせしむるはよしとせしむるは國友
 こそせしむると大い小ほびつと君とせしむると下向せんと欲せ
 しとせしむるは路次中平家は家交へゆきは通とせしむるは
 せしむるは引りへしとせしむるは宮小三好康伝とせしむるは
 かと合し本曾美伸入海は言後勅小せしむるは都と打
 こし幸ふとせしむるは總念小下向し頼朝とせしむるは
 彼婦人けり若君誕生し是瑞國友が介抱のはとせしむる

しまで毒しく云上小及び一うがれ朝までおどろたれ
 まひ何ぞ計らん其女今と命少て有人といとててび
 いよろこび且の歎息しあひ子速母もともふ出され抑
 對面あり正しくは婿男あてまうせども今と恨ぞん
 どもさるすおれは若君ありとい披あもわされうく
 ぞう小康信へ託けおれ其のち平家そくまびに海
 一統一たればもとめて相模の國志摩多の莊とたまり
 志摩多源を名と号一たり其後建久三年薩大
 隅日向右三島のちを補せられ左衛門尉に任せられ又肥
 後をとりりあふ忠久はけしあふ ありふ其は薩大隅乃

十二傳皆人仕位とあふりて鬼界が常といつても十二
 傳の内よりたあく入りのても中國の人といまごま中一
 言は通せざらん下國ありるとあふあふ下向ありて
 より故を案く暇えしあふあふ百姓とく月一ふとひ
 らるる田とこくく地とくつれ地と作とまをり小耕作
 あふせしれくがけあふ人家多くなり郡主とくり代
 友とさへて改正しく百姓撫慰れお依し國又は武
 のうまひ中く実ふ実案の位代ふもあふくびとて万民
 被給してまきびりりききひくふ忠久乃仁徳伝美ふ
 よめたるあふあふ



薩摩川本城の圖



鎮西八郎爲朝の傳

經國の智も憑じふは蓋世の勇も憐るべしは偉
 信其智高祖とゆけり百年其基と與せど終ふ未
 央の烽火と消え項王其勇百軍ふすは一旦西楚の
 霸王とあまも鳥江の流初てたは天令たきり
 しむるなり與ふ和漢を双に無勇古今壯士の豪傑
 御曹嗣漢西八郎源の爲朝とや清和天皇の後裔なり
 系圖をありあはる即ち六条判友爲義と八男と十二才小
 の祖叙あるなり
 て流は東へくどり九州と三年ふ討たるは六年治りて致へ
 より崇徳朝院の御味方となり保元の合戦お名とあり

はしきどく岡戦のそしあふ新院方大ひ致おして同志
 此者ども或いさび又い遠國へ配流とるなり刻へ新院おも後
 はへ流されあひくは爲朝ふくそとるげをとおふ致を
 爲のびて近所の國石とまされたりふ位りるが不圖重病と
 りまひてまど苦しと少一病の爲とてけりゆる浴室
 ふ入湯し療用と加へりたらたら又歌いされ大勢たあ
 小橋とわり別罪小行とてと帝とをいぬ諸々其勇
 種とおしとあひ死罪一統教し左右の腕は骨とゆき伴
 夏の大暑く流しり去をいぬは伴夏の大暑西ふり
 つまのめをり力量の若者どもと何のめあふ新院はを

子重仁親王と迎へまつりまゝにびほと攻むる所一親王乃
 御代とちとんりのとさゆぐんととてたれお義の士とらつた
 乃れおとらり為朝お後ひ一騎出千は者ども過る来
 了とてふ其人とい惟くと須成ぬる季家透回主計は
 ぬる次は言三言三丁殊紀平次を夫大矢新三言三紙矢源
 を松浦二言三言三九仲次吉田兵衛打子紀八高回二言三
 二言三言三二十八騎其外軍兵二百騎をくりひのくどり
 属とてぐひしつ威勢衝を人ゆては方おぬと切を
 りるやその年月しつり易くして妻林お実のりもきく子
 十年のちりもすどれ内為朝の男も二人女も一人と役け

くる即ち兄と控丸といひて知さく死より勇気万人ふこ
 て父為朝の威風とくけつご末たのもし死者るりけきを
 為朝たひお恨びを我家に麒麟見るとそ即ち兄七
 帝が漳と呼んで甚助源為成とぞ号する時為朝淡辺
 お出く海水に眸を泳めあがりしが白鷺をま驚二ッはま
 立ち沖の方へとびけとんく何さぬきに向ふは清ありと
 着へらりとそ一艘の船を用意し士卒十人をくりとめ
 つま沖のくく舟とそらせられが舟二日目お向ふは
 一ッは岩をへられはさていきあつんとて岩お船とよせん
 と仕られも巖石嶮しくして波濤とふお疑りてふよと



舟に中もあつて果ては舟とせしめて船の
 くらに坐してはれづ川にぞちがれあはりあはれえ来れ
 只ふそとらそ船よよく洞練まされれば船を
 潜ませし船は船をよりの時ふ向より舟のけ
 ままはりのある大童髪ひそくお生はづり舟の毛
 ひとせして色くろく眼圓るるが皆たるる刃を引ぎ揚
 げして出まりのるる為朝急な後とふりうを
 一髪はよりれば回中する大童十余人出でせしり
 船とふりより無二無三ふ切てくれれば船もせしり
 と抜ひては方おほりならまら二人と心打おうらすま

くれは舟りし者ども大いおそれ凡んふりしんといふ
 こそんぐお迹のとお明急ふゆく一衣は赤とこるは
 ちて迹のあふれといふりあへと答らりぐお迹うせ
 くれは朝急ふ打と急る二人は大童と引おしそもけ
 とい何といふ事あるぞとあひれば二人の者おとるくち
 かり上古い皆鬼神あてはそとれよの隠を著うくれ益
 深履紐をといふ室有り一がのり室も失形も人々
 たままりのされ君のごとく豪華傑けを留ふとせりの京
 おのてい永く主人と仰ふやさんといひられお朝又止
 りの汝等のおくられお隠ふるるるお出寄け者ども一人も

のこし代おまへふ百一十歳をよめ一叛く者あるふおぬ
 ていおまへく秘らさるべし一先ころかたむとをえせん
 傍おのりる大なる松の本竹の若もなく引ぬきけ
 まは二人の若人をもえ古とせそて大いふ怖まは後再
 拜して立ちりるがまむくして若人二百余人くら
 つまえそて女でさきり皆お朝がまへふ跪て永く冷
 ふ涙人といふと死ふ一君羊の鷹おれりへおびけまは
 為朝をもえて諸人お向ひ我今死三の下乃左りの股
 と射るべしといふて引ふ矢つがひ引志むつて切てまをせ
 弦おと小敷とて居りまへふおるるが左りの股お矢をさ

一若人をもえそつとつと怖まは小君の天神なり
 家内お移へおきそる右布昆布珊瑚等お物とりのふ
 持さそり為朝が若ふおれごとく積りげ貢ありとて秋
 一ひまもどもお朝つりもそとくけは拍は若小人お歳
 やどほるごとくおひらびひりけ商人をもへて性古へま
 穴おとしが今いふおちる家と作りて住らふが凡おれり
 一ふ男女老若三千余人位外とやらる為朝つとよび出
 して法と出し傳とて一美勇け何る者とあそんで
 長く一おの源家正統の西八所お朝といへ者
 かり今より後用いへばお使者とりのくむべしとて

